

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20830064
 研究課題名（和文） 発達障害児における自己理解の発達プロセスの解明と
 臨床的援助に関する研究
 研究課題名（英文） Research on developmental process and clinical supports of
 self understanding in children with developmental disorders
 研究代表者 菊池 哲平（KIKUCHI TEPPEI）
 熊本大学・教育学部・准教授
 研究者番号：70515460

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は発達障害児における自己理解の発達プロセスの解明及び援助法について検討することである。主に以下の三点について検討した。（１）自閉症児の自己理解の発達プロセスに関して自己像認知、意図模倣、視覚的注意について検討した。（２）発達障害児の自己理解を促す臨床的援助として臨床実践及び臨床場面におけるセラピストとクライアントの相互作用分析を行った。（３）発達障害児に対する障害告知とカミングアウトの実態調査を行った。結果、発達障害児の自己理解は定型発達とは異なるプロセスで形成されており、本人の自尊心・自己効力感といった情緒面への支援の必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was clarification of the developmental process of self understanding in children with developmental disorders, and the construction of clinical support methods. The research areas were as follows: (1) to examine the developmental process of self understanding in children with developmental disorders, recognition task of self image, imitation task, and visual attention task were given. (2) to examine the clinical supports, the clinical practice and the analysis of interaction between therapist and client were discussed. (3) investigation of the informing children that they have disorders, explanation to another children in the same class. The results suggest that the understanding of self in developmental disorders is formed the different process and mechanism from typical development in early development. Additionally, supports for children's affect as self-esteem and self-efficacy was required.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,190,000	357,000	1,547,000
2009 年度	980,000	294,000	1,274,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,170,000	651,000	2,821,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：発達障害、自己理解、発達プロセス、臨床的援助、自閉症

1. 研究開始当初の背景

特別支援教育の開始に伴い、自閉症やアスペルガー障害、ADHDなど種々の発達障害児が支援の対象になった。それにより特別支援コーディネーターの配置など校内支援体制の確立や、発達障害に関する高度専門家としての教員養成などが急務となっており、それに加え、より効果的な発達障害児への支援のあり方を検討することが課題となっている。その中でも最近、とりわけ発達障害児の「自己」を育むための心理・教育的援助方法の確立が必要であると着目されている(田中・都筑・別府・小島, 2007)。発達障害児はその障害特性から、自己—他者間での円滑なコミュニケーションに困難を持ちやすく、それにより園・学校・地域においてトラブルを生じやすい。その結果、二次障害として自己評価・自己効力感の低下を生じることが懸念されている。これらの問題に対応するため、本研究では発達障害児の自己理解の発達プロセスの解明と、それを踏まえた自己理解の発達援助の具体的方法やシステム作りが急務である。

近年、子どもの自己理解の発達には乳幼児期における自己—他者の基本的な対人関係性が重要であり、「自己—他者—対象」という三項関係、いわゆる共同注意(Joint Attention; Moore & Dunham, 1995)の成立が最も重要であることが多くの研究で指摘されている。自閉症を中心とした発達障害児はこの共同注意の成立が困難であり、特に共同注意行動の中でも自己—他者間の情動的やり取りが内包される叙事的指さしが出現しにくいことが明らかになっている(Sigman & Kasari, 1995)。こうした知見は、近年、Sigmanら(1995)やKlinら(2004)が、自閉症の本質的障害は自己や他者という人(animate)への関心の評価軸と、その情動の評価軸が交叉する点の障害、つまり、人への関心とその時の情動を上手く調節できない統合能力の障害と指摘している。

2. 研究の目的

これまでの研究結果から、自閉症を中心とする発達障害児が乳幼児の発達初期の段階から、自他関係を成立させること、そして自他関係を基盤にした情動理解などを獲得することができず、いわば代償的にロジカルな認知的方略を用いて種々のコミュニケーション行動を形成していることが示唆される。それにより、定型発達からのズレが生じ、発達障害としての症状が形成されてくるものと考えられよう。したがって発達障害児の自己—他者関係の成立を促すこと、そして自己—他者という2者間の関係性を基盤にしたコミュニケーション行動の発達援助を行うことで、発達障害の本態に対するアプローチが

可能であると考えられる。

しかしながら、発達障害児の自己理解の発達については、現時点では解明されていない点が多量に山積しているといわざるを得ない。それは自己理解を解明するための方法論が対象児の言語報告や鏡像に対する反応調査など、きわめて限られたアプローチで行われてきたためである。そのため対象児の年齢や知的能力が限定され、発達障害児の自己理解の発達がどのようなプロセスを辿るのか、その全体像が明らかになっていない。

そこで本研究では実験による基礎的研究の他に、事例による臨床実践などの複数のアプローチを採ることで、発達障害児における自己理解の発達プロセスを多角的・多面的に明らかにしていく。それにより自閉症を中心とする発達障害児における自己理解の発達プロセスを解明し、発達障害児の自己を育むための効果的な援助技法・システムを構築していくことを本研究の目的とする。

3. 研究の方法

これまでの発達障害児における自己理解の発達に関する研究は、自己理解を測定する方法論が限られていたため年齢や知的能力を限定したものであり、発達障害児の自己理解発達の全体像が明らかになっていなかった。そのため本研究では、実験による基礎的研究や調査、事例による臨床実践などの複数のアプローチを採り、発達障害児における自己の発達を多角的・多面的な側面から明らかにしていく。

(1) 乳幼児期における発達障害児の自己理解の発達プロセスについて

発達障害乳幼児における自己理解の発達プロセスを調査するために、以下の3つの実験を行った。

様々な自己像に対する認知実験

この実験では、発達障害乳幼児8名及び統制群としてダウン症乳幼児8名に対して、鏡映自己像と左右が反転した反鏡映自己像及び自己の動きが2秒間遅延して呈示される遅延映像を呈示し、それに対する被験児の反応を調査した。

意図理解と運動模倣能力に関する実験

この実験では、発達障害乳幼児8名及びダウン症乳幼児8名に対して、単純な運動模倣に関する模倣課題と他者の意図理解が必要となる行動再演課題のパフォーマンスを比較し、意図理解と模倣能力には関連性があるのかについて検討した。

視覚的注意(visual attention)に関する実験

この実験では、発達障害乳幼児及び定型発達乳幼児に対して、色が付いたや、など簡単な形態の視覚刺激を呈示し、それと同じ色が付いた違う形態の刺激と同じ形態で色

が違ふ刺激を被験児に与え、どちらを優先してマッチングするのかについて検討した。

(2) 発達障害児への自己理解を促す臨床的援助について

発達障害児への自己理解を促す臨床的援助法を検討するため、以下の2つの研究を行った。

不登校を示すアスペルガー障害生徒に対する臨床実践

担任とのトラブルから不登校に陥った中学1年のアスペルガー障害生徒に対して臨床的支援(カウンセリング、保護者支援、学習支援など)を行った。

発達障害乳幼児に対する基礎的コミュニケーション支援

発達障害を持つ乳幼児4名に対して、他者理解及び言語理解を促すためのプレイセラピーを実施し、その効果について検討した。

発達障害乳幼児同士の相互作用を高める方略の検討

3名の発達障害乳幼児に対するグループプレイセラピーを実施し、お互いの存在を意識し関わり合うことを目的にしたセラピーを実施し、その効果について検討した。

自閉的ファンタジーを示す発達障害生徒に対する関わり方の検討

高等特別支援学校に通学する女子生徒に対して、女子生徒が示す自閉的ファンタジーを共有する試みを行い、ファンタジーの内容やこだわりの強さなどにセラピストがどの程度介入できるのかについて検討した。

(3) 発達障害児における障害告知とカミングアウトの実態調査

発達障害児に対して、自身の障害を告知する若しくは障害特性を説明するといった障害告知の問題について、その実態(時期、方法、内容など)に関する調査と、同じクラスに在籍している他児に対するカミングアウト(障害名や特性など)について、その実態調査を行った。

4. 研究成果

本研究課題によって得られた主な知見は以下の通りである。

(1) 乳幼児期における発達障害児の自己理解の発達プロセスについて

様々な自己像に対する認知実験

実験の結果、発達障害乳幼児はいずれの条件でも自己像が呈示された際に生じる自己指向的行動(恥ずかしがる、自分の身体を触る、髪をいじるなど)が少なく、身体を揺らすなどの大きな動きが多かった。一方、同室している実験者へのふり返り行動が少ないことも示された。また発達障害乳幼児の特性として、自己像への注視時間が発達年齢2歳後半になると大きく伸びることが示唆された(ダウン症乳幼児では発達年齢による注視

時間の変化はなかった)。また発達障害児は遅延自己像が呈示された場合に最も楽しそうに反応することが示唆された。

ここから発達障害乳幼児の自己像に対する理解は発達年齢に強く依存しており、さらに統制群で見られた自己指向的行動がほとんど見られないことから、通常とは異なるメカニズムで形成されている可能性が示唆された。その一方、遅延自己像に対して最も強く反応することから、自身の身体の動きと呈示された映像の動きの時間的ズレという要因を楽しんでいることが示唆された。したがって、対象児自身の動きをセラピストが模倣する「逆模倣セラピー」が有用ではないかと示唆された。

意図理解と運動模倣能力に関する実験

実験の結果、発達障害乳幼児の運動模倣課題の成績は統制群よりも有意に低く、運動模倣能力の困難が示されたが、一方で意図理解が必要な行動再演課題を通過した被験児は運動模倣課題の成績が他の幼児よりも高く、発達障害児の模倣能力は意図理解能力が強く影響することが示唆された。統制群では意図理解と運動模倣の成績の間に関連は見いだせなかった。また発達年齢との比較では、運動模倣課題の成績と関連が深いのは「理解言語」「表出言語」「社会性」に関する領域であり、発達障害児の模倣能力及び意図理解には言語や社会性が大きく関与することが示唆された。

視覚的注意(visual attention)に関する実験

定型発達幼児では年少児では形で刺激をマッチングすることを優先し、年長時になると色と形を同程度の割合で選択することが示された。したがって年少児では形態視が多いが年長になるにつれて形態視と色彩視をバランスよく用いることができるようになることが示された。一方で発達障害乳幼児は色を基準に判断することが多く、色彩視が多いことが示された。ここから発達障害乳幼児は視覚の手がかりが呈示された場合、形の同異を判断するよりも全体的に把握しやすい色彩に注意が向きやすいことが示唆された。

(2) 発達障害児への自己理解を促す臨床的援助について

不登校を示すアスペルガー障害生徒に対する臨床実践

対象生徒は当初は担任からの不当な扱いに対する被害感を多く述べており、その被害感をどのように扱うかについて介入をしてみた。しかしながらカウンセリングや親介入をしているうちに、被害感そのものの問題というよりも、不登校状態にあることで勉強から逃れられるという疾病利得がその根底にあることが伺われた。その疾病利得について本人は意識しておらず、担任教員の言動に

対するこだわり意識が集中している状態であった。そこでそのこだわりについて介入するのではなく、勉強から逃れられているという事実を本人に直視化させることで、徐々に不登校状態が改善された。こうしたことから、アスペルガー障害など本人の特異的なこだわりや認知面での偏りから生じる2次障害について介入するためには、具体的なトラブルに直接介入をするのみでなく、本人の情緒的安定を図りながら、その背景にある根本的な問題について介入する必要性が示唆された。

発達障害乳幼児に対する基礎的コミュニケーション支援

言語及び非言語的コミュニケーションの発達を支援するための方策として、「情動的やりとり」及び「共同行為ルーティン」を基礎としたセラピーを行った。結果、対象となった4名とも基礎的コミュニケーション能力が上昇したことが示された。一方で、より高次のコミュニケーション能力を高めるためには、概念理解や自己コントロール能力を高めるなどの方策が必要であることが示唆された。

発達障害乳幼児同士の相互作用を高める方略の検討

発達障害乳幼児3名の相互作用を「接触の回数」「接触時間」「ターン数」の観点から分析した。介入期において対象児同士がお互いを意識できるような遊び、持続的なやりとりが可能な遊び、やりとりのターンが明確な遊びを取り入れた。その結果、介入期後には「接触回数」「接触時間」「ターン数」いずれにも変容が見られ、関わりが増大するだけでなく一回のやりとりが持続するように変化した。また他者評定により集団としての凝集性も高まることが示唆された。

自閉的ファンタジーを示す発達障害生徒に対する関わり方の検討

対象となった発達障害生徒は、アニメやドラマのキャラクターなどについてのこだわりを持ち、それらの人物が登場するストーリーをTPOに関係なく話し続けるという特徴を持っていた。そうした女子生徒の特徴は、周囲からは不適切行動として捉えられていたが、セラピストがそのファンタジーに対して積極的傾聴を行い、さらに曖昧な表現の箇所に対して介入していくことで、徐々にストーリーが洗練されてきた。その上で話す場所と時間を設定することで、徐々にファンタジーを話しても良い場所と時間、相手が確立されてきた。したがって、自閉症児者の特異的症狀といわれていた自閉的ファンタジーであっても他者からの介入によって変容していくこと、また了解可能なやりとりへと変化させていくことが可能であることが示唆された。

(3) 発達障害児における障害告知とカミングアウトの実態調査

特別支援学級に在籍する子どもの母親5名から聴取した結果、本人告知に関しては、特性の説明を行っていたのが4事例(80%)、特別な支援が必要と説明していたのが1事例(20%)であった。本人からの疑問は2事例(40%)でみられた。カミングアウトは、特性の説明を行っていたのが3事例(60%)で、特別な支援が必要と説明していたのが1事例(20%)、行っていないのが1事例(20%)であった。他児からの疑問があったのは1事例(20%)であった。

一方、通常の学級に在籍する子どもの母親5名に聴取した結果、本人告知に関して、特性の説明を行っていたのが3事例(60%)、特別な支援が必要と説明していたのが1事例(20%)、その他説明が1事例(20%)であった。本人からの疑問は2事例(40%)でみられた。カミングアウトについては、特性の説明を行っていたのが1事例(20%)、特別な支援が必要と説明していたのが1事例(20%)、行っていなかったのが3事例(60%)であった。他児からの疑問があったのは、2事例(40%)であった。上述した事例中、診断名まで告知している事例はなかった。しかし、すべての事例で何らかの説明を行っていた。

結果より、本人に対する障害告知が持つ機能には、次の二つが考えられた。一つ目は「特別な支援への疑問に対する回答や、特別な支援を受け入れてもらうための説明」である。特別支援学級に在籍している場合、必然的に特別な支援が行われる。そのため事例Gのように、それに対する疑問への対応や、なぜ特別な支援が必要なのか、子どもに納得してもらうために説明が行われているということである。通常学級に在籍していても、より積極的な支援を行う場合にはこの説明が必要になると考えられた。二つ目は、「苦手さなどの自分の特性への気づきに対する説明」という機能である。子どもの「周りの子とは違う。」や「なぜできないんだろう。」といった、気づきや疑問に対して「～が苦手だよ。」と具体的に言葉にすることで、子どもの自己への気づきを深めたり、または苦手なことに対して対処法を自分で考えられるようにしたりという機能があると考えられる。

一方、カミングアウトについては今回の調査では、診断名まで他児に伝えている事例はなかった。やはり診断名を伝えても、正しく理解されず誤解される可能性が高いため、慎重になっている事例が多いようであった。加えて母親の意識として、カミングアウトは「トラブルを解決、予防するため」と考えられているようであり、具体的にトラブルが生じる若しくは生じる可能性が極めて高くな

った場合にカミングアウトが行われることが示唆された。

また他児の疑問や気づきにも段階があることが示唆された。ある事例では他児からの疑問に対し、「当該児童が特別な支援が必要である」という説明のみで他児は納得しているが、他の事例では他児が発した疑問が対象児や担任への不信感とつながっていた。したがって他児の疑問に対してどのように説明するかのみでなく、説明した後にもさらに経過を見守る必要があることが示唆された。

(4) 本研究課題全体を通して

上述した本研究課題によって明らかになった知見はいずれも公刊するために投稿準備中である(一部は既に公刊済み)。本研究課題では一貫して、発達障害児の自己理解に焦点をあて、様々な発達レベルに応じてその自己理解を検討してきた。その結果、発達障害児の自己理解には、定型発達とは異なるプロセスがあり、特に他者視点が欠如しやすいものであることが示唆された。そのため自己像に対する反応や運動模倣などの反応に特異性が出るものと考えられた。一方で、発達障害児に対する臨床実践では、そうした発達障害児の特異的な自己理解も他者が介入することが可能であり、他者が介入してガイドすることで不適切な反応が抑制され、より適切な方向へと自己理解が進むことが示唆された。

従来の研究では発達障害児の特異性が強調され、また適応的スキル形成に主眼が置かれるなど、発達障害児の内面世界に着目されることは稀少であった。しかしながら、本研究課題では、そうした発達障害児の内面に着目した点で、従来の研究にはない新たな視点を提供することができたものとする。特に発達障害児の内面世界について、臨床的介入によって変容が可能であるとの知見は、今後の特別支援教育の在り方を考えていく際にも重要であろう。

一方で、障害告知やカミングアウトに関する研究から得られた知見では、現在の特別支援教育に関する問題点も示唆された。例えば、カミングアウトがより積極的な支援を受けるための方策として用いられるというよりも、トラブルの解決・予防といったために行われており、どちらかといえば消極的な実施であるという実態が明らかになった。したがって、個々のニーズに合わせた特別支援教育を円滑に進めていくためには、より積極的な支援のためのカミングアウトの在り方、方策を考えていく必要があることが示唆される。今後は、上述したような問題点を検討するための実践的研究を進めていくことが必要であるとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

菊池哲平・原田恵梨子、自閉症幼児における色と形に対する認知特性、熊本大学教育学部紀要[人文科学]、査読無、58巻、2009、175-181

[学会発表](計1件)

菊池哲平、自閉性障害児者における文脈情報からの情動的意味の読み取りに対する志向性の検討、日本特殊教育学会第46回大会、2008年9月20日、米子コンベンションセンター。

[図書](計1件)

菊池哲平・他、有斐閣、「自尊心」を大切にした高機能自閉症の理解と支援、2010年、第2章及び第4章担当(25-52,81-100)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊池 哲平 (KIKUCHI TEPPEI)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：70515460

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

岩下 陽平 (IWASHITA YOHEI)

熊本大学・大学院教育学研究科・大学院生

榎木 田祥代 (ENOKIDA SACHIYO)

熊本大学・大学院教育学研究科・大学院生

原田 恵梨子 (HARADA ERIKO)

熊本市立長嶺中学校・講師